

# 内部被ばくから子どもたちを守ろう

～そのために、まずは学ぶことから始めよう～

宗谷教職員組合

## はじめに

宗谷教職員組合は、平成24年2月25日に行われた第23回定期大会において「第五号議案「原発災害・内部被ばくから子どもたちの命と希望を守る運動を開始しよう！—20年・30年後を見すえた宗谷の教育運動のあらたな課題について—」という特別議案を可決しました。

この課題に向かって取り組んでみてわかったのは「よくわからない」ということでした。果たして、それはどうしてなのでしょう。様々な要因があって、要因が多すぎて、困っている…そんな事実もあるでしょう。ただ、一番大きな要因は、「被ばくって何！？目に見えないし、よくわからない。」というところにあるのではないのでしょうか。

どうして「よくわからないのか」。まずはここからはじめてまいりましょう。よろしく願いいたします。

## 第一部「内部被ばく」に関する“もやもや”を晴らすために

### 1 福島第一原発事故がもたらす「よくわからなさ」

#### (1) 3. 1.1 福島第一原発事故

- ・ありとあらゆる『「史上初めて」と「本当に怖い話」』<sup>1</sup>がぼっ発  
「脱原発」「電力会社」「原子カムラ」「放射能汚染」「除染」「事故の終息」「政府の対応」  
「がれき」「原発再稼働」「外部被ばく」「内部被ばく」
- ・宗谷教組が取り組むのは「内部被ばく」  
⇒「放射性物質が再拡散する」という点では、様々な問題と関連がある。ただ、それは二次的な問題。まずは「内部被ばく」そのものを理解する必要があるのではないか？

#### (2) 「内部被ばく」の「よくわからなさ」

- ・なぜ、「内部被ばく」はよくわからないのか。  
「今まで安全だったから？」  
「誰もが初めての経験だから？」  
「放射性物質は見えないから？」  
「安全神話」  
「情報操作」  
「ただちに健康に影響を及ぼすものではない」
- ⇒どれも本当だろう。  
被ばくが語られないわけを解き明かす必要がある。

<sup>1</sup> 放射能と原発のこれから 武田邦彦 P10

## 2 「内部被ばく」が語られないわけ

### (1) 安全神話

- ・事故以前から流れてきた「安全神話」が現在も徹底されている。

「政治そのものが、(中略) 長時間、内部被曝を隠ぺいする立場をとり続け、真理を探究する科学より、アメリカの核戦争と原子力業界の利益を追求してきた」「命と生活を守る科学的認識に立ってこなかった」<sup>2</sup>

- ・福島汚染状況、福島で出てきている健康被害<sup>3</sup>
  - ・6才 3. 11後、10回以上鼻血。そのうち3回は30分間、鮮血の鼻血が出続ける。
  - ・19才 抜け毛がひどい
  - ・咳、口内炎、下痢、ぜんそく、目の下のクマ、頻繁にできる青あざ、顔の色が黒くなるなど
- ・福島では「被ばく語れぬ空気 福島の高校教諭退職」(東京新聞2011年8月6日)<sup>4</sup>

社会のあり方を変えていかないと、本当の意味で自分たちを守ることができない。

### (2) 歴史的に作り続けられてきた「安全神話」

- ① 1952年 カナダ チョーク川発電所で炉心が溶融しかけた事故
- ② 1957年 イギリス ウィンドスケール発電所で火災 周辺の放射能汚染を起こす
- ③ 1957年 旧ソ連南ウラル山脈の核兵器工場で爆発 1万人が避難
- ④ 1967年 東ドイツ ルブミン発電所で火災 炉心が溶融しかけた事故
- ⑤ 1979年 アメリカ スリーマイル島発電所で部分炉心溶融が起こり、放射性物質が大気中に飛散  
「勧告」「避難」「屋内退避」…州知事のリーダーシップが功を奏す。  
→膨大な損害賠償裁判はすべて「証拠不十分で却下」  
2009年、今後20年の営業運転を許可
- ⑥ 1986年 旧ソ連 チェルノブイリ発電所で大爆発 78人死亡、数千人の負傷者を出す  
→当時の当局「地域住民に『直接的な』被害者はいなかった」
- ⑦ 1995年 高速増殖炉「もんじゅ」事故  
→事故が詳細に報告されていないことが最大の特徴
- ⑧ 1999年 日本 茨城県東海村で臨界事故 作業員2人死亡

日本の事故は資料がない。<sup>5</sup>

### (3) アメリカ主導の「安全神話」づくり

#### ① 「国際放射線防護委員会 (ICRP)」

- ・放射線のリスク評価の「国際的権威」
- ・ほとんどすべての医療機関、教育機関、原子力機関が考え方を受け入れている。

<sup>2</sup> 「内部被曝」矢ヶ崎克馬・森田 敏也、岩波ブックレットP10

<sup>3</sup> 未来授業 東京FM 第3回 未来授業 Vol.44 鎌田實『がんばったり、がんばらなかつたり』医師・作家。1948年東京生まれ。諏訪中央病院名誉院長。医師として地域医療の最前線に37年間取り組んでいる。一方で、チェルノブイリやイラク、現在は東日本大震災の被災地支援に力を注いでいる。作家としてはベストセラー「がんばらない」や、「チェルノブイリ・フクシマーなさけないけどあきらめない」、「希望」など多数。

<sup>4</sup> 小児科医が診た放射能と子どもたち 山田 真 クレヨンハウス P15

<sup>5</sup> 「放射能と健康被害 20のエビデンス」岡田 正彦 P40~P50

## ② 「ICRP」の歴史

- ・第二次世界大戦以前

アメリカ 放射線被曝労働の管理を行う組織が国際化

「国際X線およびラジウム防護委員会」大戦中活動停止。戦後復活「コスト・ベネフィット論」

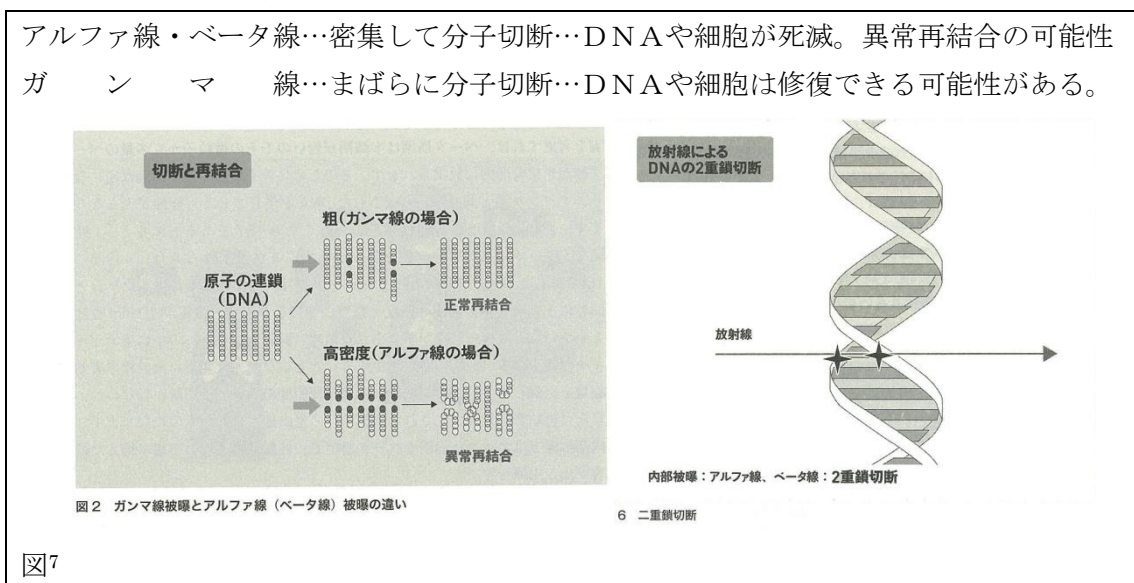
## ③ 「ICRP」の課題

- ・課題…内部被ばくが見えなくされている。  
放射線の生命に対する被害が軽視されている。 } 「ICRPの二つの致命的な欠陥」

- ・「具体性の捨象と単純化・平均化」<sup>6</sup>

内部被ばくの被害を隠してしまう。

アルファ線・ベータ線…密集して分子切断…DNAや細胞が死滅。異常再結合の可能性  
ガンマ線…まばらに分子切断…DNAや細胞は修復できる可能性がある。



すべての被ばくを「量の大きさ」に単純化。

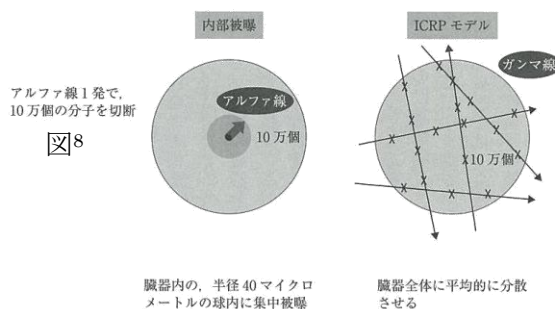
細胞分裂のメカニズムも取り入れず=身体へのダメージの蓄積の切り捨て

ICRPは極度にベータ線による被ばくを過小評価

→危険度の判定はエネルギー総量になってしまう。

※実際は、放射線がどこにどのように当たったか  
ということが大切。

「平均化」されることで「低線量では、そのようなことは起こらない」と実態が隠される。



<sup>6</sup> 「内部被曝」矢ヶ崎克馬・森田 敏也、岩波ブックレットP33 矢ヶ崎による表現

<sup>7</sup> 「内部被曝からいのちを守る」市民と科学者の内部被曝問題研究会編 P75「図2」、P80「図6」

<sup>8</sup> 「内部被曝」矢ヶ崎克馬・森田 敏也、岩波ブックレットP35「図4」

#### ④ ICRPの内部被ばく隠し

##### I. 核戦略と内部被ばく隠し

広島・長崎の惨禍を小さくみせる。

「ロンドン・デイリー・エクスプレス」

広島では、最初の原子爆弾が都市を破壊し世界を驚かせた三十日後も、人々は…  
…『原爆症』としか言いようのない未知の理由によって、いまだに不可解かつ悲惨にも亡くなりつづけている。

「ニューヨーク・タイムズ」

倒壊し瓦礫と化した広島……では、原子爆弾は、いまだに日に100人の割合で殺している。

##### II. チェルノブイリでの被ばく隠し

ICRP、IAEA（国際原子力機関）、WHO→（健康被害は）放射能起因でないと考えられる。

「汚染地域の住民の間に、チェルノブイリ事故による放射能の影響は認められない。」

「汚染地域の住民が陥っているのは『放射線恐怖症』という病」

#### （4）ICRPを批判する「ヨーロッパ放射線リスク委員会（ECRR）」

1997年に設立された市民組織

ICRPの功利主義「10万人に5.5人程度のガンによる死亡は許容される」を批判

「深刻な、または不可逆的な被害の恐れがある場合」には予防的対策をとらなければならない

「内部被曝を、外部被曝の平均で600倍の危険として考えるべき」

内部被ばく	<sup>9</sup>	外部被ばく
アルファ線・ベータ線	放射線	ガンマ線
密集して分子切断	被ばくの仕方	まばらに分子切断
高密度の被ばく領域は体内に入った放射線の数だけ	被ばくする場所	ガンマ線が通過した場所
局所的に実効線量が高くなった部位	健康被害	

<sup>9</sup> 「『内部被曝』矢ヶ崎克馬・森田 敏也、岩波ブックレットP36下段の文を内藤が要約

## (5) ICRPとECRRの見解の違い

ICRP		ECRR
117万人	1945年～1989年 「世界中で放射線により命を落とした人」	6500万人
①国家機関が最も高い計画的な被曝線量として20～100mSvの範囲で参考レベルを設定する…と勧告 ⇒日本は対応する。 (1)「学校の校舎・校庭等の利用判断における暫定的な目安」を1～20mSvに。 (2)環境省が除染の対象地域を当初年間5mSv以上の地域と決定。	福島第一原発事故への対応 <sup>10</sup>	①原発から100Km以内の300万人にECRRモデルを適用すると、これらの人々がそのまま生活を1年間続けるとすれば、今後10万人がガンと診断され、今後50年間で20万人のガンが新たに推定される。 ②半径100Km圏内で北西に住む住民は直ちに避難されるよう勧告したい。

### 3 内部被ばくがもたらす「本当の危険」

#### (1) 「具体性の捨象と単純化・平均化」による危険性

- ・放射線量の平均化だけでなく、「人」に対しても平均化している。  
「人」には様々いる。⇒性別、年齢差、個性
- ・人の個性による「放射線に対して極端に弱い人」
  - ・何らかの病気を抱えている。
  - ・免疫力が衰えている。
  - ・女性や子ども、お年寄り

#### (2) 功利主義によって「本当の危険」が操作されている。

##### ① 「ICRP 1990年勧告」<sup>11</sup>

「経済的、社会的要因を考慮して、合理的に達成できる限り、放射能を防護する。」

##### ② 「ICRP 2007年勧告」

平常時 年間1ミリシーベルト以下 ←外部被ばくの量

緊急時 年間20～100ミリシーベルト以下

緊急事故後の復旧時 年間1～20シーベルト以下

##### ③ 「放射線管理区域」

年間5ミリシーベルト

これを超えると、白血病が増える。労働災害。

東電は、原子炉で働く人に対して1ミリシーベルトの自主規制をしいていた。

35,000人の作業員が80,000に増えた。

<sup>10</sup> 内部被曝低線量被害と内部被曝について 吉木 健「内部被曝からいのちを守る」旬報社

<sup>11</sup> 放射線防護の目的は

①利益をもたらすことが明らかな行為が放射線被ばくを伴う場合には、その行為を不当に制限することなく人の安全を確保すること、

②個人の確定的影響の発生を防止すること、

③確率的影響の発生を制限するためにあらゆる合理的な手段を確実にとること

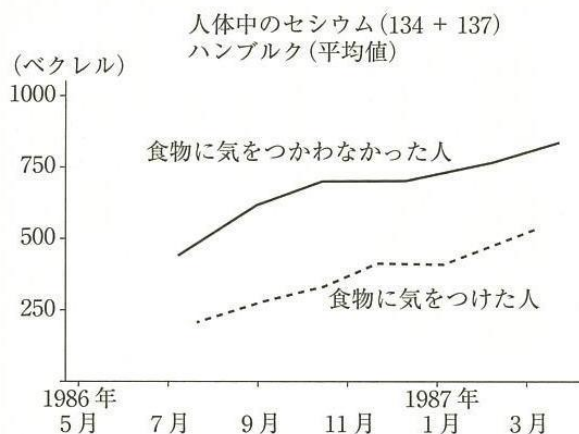
です。ICRPはこれらの目的を達成するために、放射線防護体系に、正当化、最適化、線量限度という「三原則」を導入することを勧告しています。放射線科学センター<http://rcwww.kek.jp/index.html>

#### 4 「前例」に学ぶことしかできない、ニッポンの未来

放射線による晩発障害…チェルノブイリ原発事故に学ぶほか、前例がない。

##### (1) チェルノブイリ事故のあとの人々の反応

- ・ 食事などに気をつかい、内部被ばくを避けようと努力した人
- ・ 安全を確保することをあきらめた人
- ・ 「内部被ばく隠し」にだまされた人



食べものに気を付けた人、気をつけなかった人<sup>12</sup>

ベラルーシにおける小児甲状腺ガンの推移<sup>13</sup>

チェルノブイリ被災地では事故後5年目に、子どもの甲状腺ガンが急激に増え始め10年後ピークに。

→その後減少、しかし15才以上の思春期、さらに大人の甲状腺ガンが増加。

##### (2) 食卓にあがった放射能 ～世界中で起こったことが日本の中で起こるのではないかと～

###### ①食物連鎖

- ・ 降雨→土・草という汚染→植物の汚染→動物への汚染
- ・ スウェーデンのトナカイ、ドイツの牛から考察できる食物連鎖
- ・ 震災直後の汚染稲ワラからの牛肉汚染<sup>14</sup>
- ・ 魚が受ける影響→福島で行われている除染と水の関係<sup>15</sup>

⇒人間の食べ物という視点での問題に<sup>16</sup>

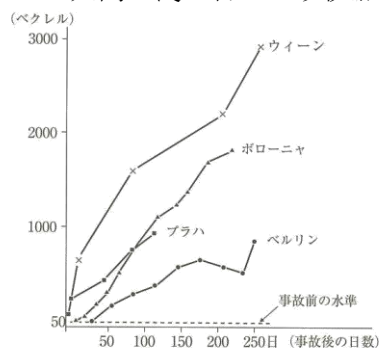


図3-9(a) 人体中のセシウム-137

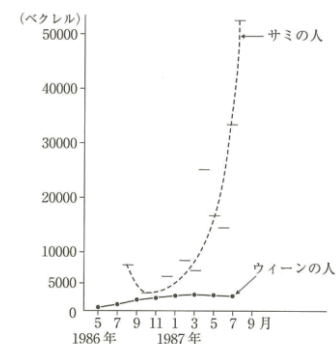


図3-9(b)

<sup>12</sup> 食卓にあがった放射能 高木仁三郎・渡辺美紀子 七つ森書館 P47

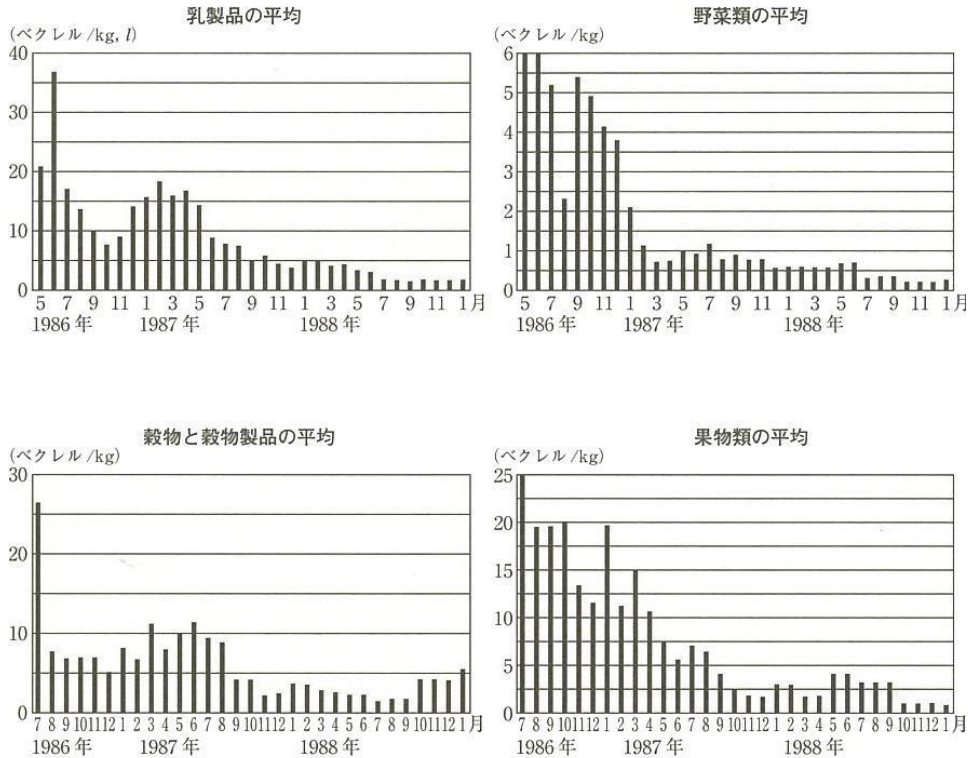
<sup>13</sup> 「子ども・給食(菅谷 昭)」P147 「放射能汚染食品、これが専門家8人の食べ方、選び方」東洋経済新報社

<sup>14</sup> 「暫定規制値」山口英昌「放射能汚染食品、これが専門家8人の食べ方、選び方」

<sup>15</sup> 「原発授業～これからの話」川原茂雄氏講演より 収録 2012. 5. 12 宗谷管内学び愛フェスタ

<sup>16</sup> 食卓に上がった放射能 P60 図3-9(a)、(b)

・食品汚染度の変化<sup>17</sup>



⇒穀物と穀物製品の平均 1988年以降は何が起きているのか。

②手を変え品を変えて

- ・1989年8月17日（事故から40カ月後）共同電

「モスクワなどで売られているソーセージ類には、チェルノブイリの汚染肉が相当程度混ざられている」  
 廃棄されるべき汚染肉が廃棄されていない。うすめられて他の加工品になったり、基準が低い国に輸出されたりしている。

- ・1989年5月 仔牛の飼料かに高い汚染を記録

「汚染された（食品としての）脱脂粉乳が廃棄されずに家畜の飼料にまわった感じ」

③品は変えずに場所を変えて

- ・1989年9月28日朝日新聞

「西アフリカ諸国にチェルノブイリ原発事故で放射能汚染したヨーロッパ産の冷凍牛肉が運び込まれ、売られているとの情報が伝わり、現地住民の間でパニックが広がった」



<sup>17</sup> 食卓上がった放射能 P74 図3-11

## 5 第一部まとめ「怒りを胸に、楽天性をもって最大防護を」

①政府の「直ちには健康に影響はない」という安全キャンペーンを批判的に見る。

前述「食べものに気を付けた人、気をつけなかった人」から得る教訓

②「みんなで支え合う大きな利己主義」「怒りを胸に、楽天性をもって最大防護を」<sup>18</sup>

矢ケ崎『できるだけ周りの人々と声を掛け合い、仲間を持ちましょう』

『正しい知識を持ち、勇気をもって、賢く、人間愛に基づいた判断をしていきましょう』

③「専門家」はあてにならない

放射線学の教科書は、内部被曝を非常に小さく扱っている。

④「暫定規制値」「平常時の規制値」の考え方<sup>19</sup>

安全値というよりは、「出荷できる基準値」

規制値以下のものは、出荷され流通する

⇒「含まれていないもの」なのか「含まれているけど表示されていないだけ」なのかは判断できない。

⇒給食目安1キロ40ベクレル 文科省、東日本17都県に初通知に対する批判<sup>20</sup>

## 第二部 宗谷の大地で生きる子どもたちを「内部被ばく」から守るために

### 1 「宗谷の教育」の歴史、偉大な財産から学ぶ<sup>21</sup>

#### （1）地域の生活危機は教育の危機

・1963年～65年 三年連続襲われた宗谷管内の冷害・凶作・不漁

「昼休みの弁当の時間になると、そっと教室から姿を消す子どもが増え始めている」

「PTA会費を集める日になると欠席する子どもが増えている」

⇒宗谷の各市町村に共通する深刻な教育問題と整理。調査活動へ。

「親たちの生活の危機は子どもたちの危機だ」「地域の生活破壊は教育の危機だ」

#### （2）農民と手を結ぶ運動

「父母の生活水準が高まらなければ、ゆきとどいた教育も不可能」

「生活苦をかくさず話し合ってみんなの生活を良くする共同の要求行動を」

農民たちとともに教職員組合を代表して宗谷支庁と団体交渉

要求内容 1 農漁民の凶作、凶漁に生活資金一戸五十万円を貸し付けること。

2 生活困窮者に生活保護を大幅に適用し、支給基準を引き上げるとともに、生活に困る家庭の児童・生徒に公費で新学期の学用品の購入補助金を支給すること。

#### （3）住民ぐるみの要求運動

農家…返済の見通しのない借金経営 漁民…過疎・出稼ぎ、老人と子どもたちだけの家庭

1974年「教育とくらしを守る大運動」

<sup>18</sup> 「内部被曝」矢ケ崎・守田 P56「第五章『放射線被曝に、どのように立ち向かうのか』より

<sup>19</sup> 「放射能から子どもの「食」を守る方法」P133 消費者問題研究所編

<sup>20</sup> 20111201 MBSラジオ たね蒔きジャーナル 京都大学原子炉実験所助教 小出裕章

<sup>21</sup> 「宗谷の教育合意運動とは」横山幸一・坂本光男、大月書店



教師と父母が教育と生活の要求で結びあい地域ぐるみで運動をすすめたとき、計りしれないほどの大きな力を発揮することができる

#### **(4) 稚内の子育て運動<sup>22</sup>**

1977年 北教組稚内支会「子どもたちの健やかな成長を願い当面の課題である非行克服について全市民運動へと発展させる」ため緊急アピール（のちに共同アピール）をもとに、関係団体と懇談。

非行問題懇談会「心身ともにすこやかな子どもを育てよう」の共同アピール

稚内市民集会 1978年6月16日 20団体の代表によって開かれる。

⇒その後は、地域ごとの対話小集会として積み重ね。

1984年4月23日 稚内市子育て推進協議会へ

#### **(5) 宗谷の未来を明るく照らす住民ぐるみの医療運動**

- ・教職員組合が中心的役割を發揮した「離島検診」<sup>23</sup>
- ・住民が主人公の建設運動<sup>24</sup>

1994年5月 宗谷の医療と教育を守る運動 … 見たこともやったこともない到達点

##### **① 貫かれる住民が主人公の建設運動**

「宗谷医院建設の集い」宗谷各地から300人の住民が参加

住民の夢や希望を反映し、民主的医療運動に対する大きな信頼を築きながら建設が進んでいる。

##### **② 職場を基礎とした取り組み**

- ・私たちが教職員が自覚的に友の会に加入し、職場を単位に自らが主人公になって医療と健康を守る運動の先頭に立つという成果
- ・医療懇談会を職場・学校・地域で開催。父母と教職員が積極的に学び合う。

医療運動を、教職員・父母・住民との共同で作らだしていき具体的な取り組み、条件の拡大、それを組織していく組合の果たした役割として貴重な経験

## **2 第二部まとめ「宗谷の教育」を牽引してきたものは…<sup>25</sup>**

「宗谷で積み上げられてきたものには、数多くの教訓があります。それは端的にいえば、

- ① 子どもが人間として大事にされている。
- ② おとなたちのとりくみに民主主義のイロハが貫かれている。」

「おとなたちが共同の努力さえすれば、可能なことであり、宗谷だけが特別な人間のいるところではありません。まして重要なのは、日本の中に厳然と憲法・教育基本法が存在しているということです。そして、宗谷はその精神を生かすためにひたすら努力しているだけのこと。

<sup>22</sup> 稚内の子育て運動 1988年6月18日 稚内市子育て推進協議会

<sup>23</sup> 宗谷教職員組合第5回定期大会議案 1994年2月26・27日

<sup>24</sup> 宗谷教職員組合第6回定期大会議案 1995年2月25日・26日

<sup>25</sup> 「子育て・教育を宗谷に学ぶ」坂本光男 大月書店

### 第三部 子どもたちを内部被ばくから守る全国各地の動き

#### 学校給食 伊勢崎市<sup>26</sup>

群馬県 伊勢崎市は 学校給食の放射性物質測定に新しく機材を購入し今月より毎日測定することを発表しました。 これまでは外部へ委託し月 1 回のペースで測定していましたが、自前の測定器で 6ヶ所ある 調理場 での測定や地場野菜の測定を行って 市ホームページで公表していきます。

#### 給食食材の放射能検査 安全安心へ新年度から いすみ市<sup>27</sup>

いすみ市は、新年度から食品放射能検査機器を用いて小中学校と保育所の給食に使われる食材の放射性物質検査に乗り出す。昨年 9 月以降、独自に取り組む食材の産地表示に続き、安全安心な給食を提供する狙い。

#### おわりに

原発、放射能、食…、「変わってしまった世界<sup>28</sup>」で生きることになる現在、そして未来の子どもたち。だからこそ、宗谷の子どもたちのために、私たちは「宗谷の教育運動」の財産から学び、保護者や地域の方々と声を掛け合い、正しい知識をもとに判断できる「みんなで支え合う大きな利己主義」を作っていくことが大切ではないでしょうか。

もちろん、これまで行われてきた「宗谷の教育運動」との「現状認識の違い」があるのも明らかです。それは、冒頭に述べた「よくわからなさ」が膨大であり、日本はもちろん、世界中で本当の被害が隠されている状況であること、そしてこのことによって、「内部被ばくに対する困り感」が宗谷では見えていないということです。

しかし、日本全国に視点をかえると、勇敢に正しい情報をもとに力合わせをしている団体・組織は数多くあります。そして、そうした人々による運動によって行政が行動を起こしはじめている現実もあります。こうした事実にも勇気をわけてもらいながら、目の前の子どもたちの「数年後の健康」を守るために、力合わせをしていきましょう。

<sup>26</sup> 「食物連鎖の危機から子どもたちを守りましょう」 <http://www.shokumotsurensa.com/?p=1624>

<sup>27</sup> 「ちばとぴ」 <http://www.chibanippo.co.jp/c/news/local/73249>

<sup>28</sup> 「原発のウソ」 小出裕章 扶桑社新書